

单士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流：朝日、池田信子

稲森，雅子
九州大学文学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7183057>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.141-158, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

——朝日、池田信子——

稲 森 雅 子

晩清の女流知識人・単士釐（一八五八―一九四五）は、外交官の夫・錢恂（一八五三―一九二七）に随って、一八九九（明治三十二）年に初めて日本の地を踏み、一九〇七年に錢恂が欧州へ赴任するまで、しばしば日本に滞在した。^①この間、夫のロシア行きにも随行し、中国人女性初の海外旅行記『癸卯旅行記』を著した。また、日本語を習得して翻訳に挑戦し、複数の日本人女性たちと親好を結んだ。その様子は、彼女の詩文から窺い知ることができるとりわけ下田歌子や津田梅子ら著名人との交流は夙に知られている。筆者はこれまで、詩文に名のある日本人三名（柳原氏、小田切夫人桂子、大島夫人）について考証してきた。^②

単士釐・錢恂夫妻は、東京のほか鎌倉にも別邸を構えた。単士釐は、鎌倉を気に入ったとみえ、記憶に留めるべくそこでの出来事を詩歌に詠んだ。本稿は、単士釐の詩歌等より、鎌倉滞在の時期やそこで縁を得たと思しき日本人女性（朝日、池田信子）について検討する。

一 単士釐の詩文に登場する日本人女性

はじめに、主な単士釐の詩文集と、そこに名が見える日本人女性について、あらためて確認しておこう（重複して記載される場合は『癸卯旅行記』を優先した）。

（１）『癸卯旅行記』^③ 六名

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

小具貞子（愛住女学校校長）、時任竹子（実践女学校）、河原操子（上海・務本女学校日本語教師）、柳原氏（湖北・自強学堂日本語教師、柳原又熊夫人某）、鈴木陽之助夫人、朝日（錢恂妾）

（2）詩集『受茲室詩鈔』等⁴ 五名

津田梅子（女子英学塾）、下田歌子（実践女学校）、池田信子、小田切夫人桂子（上海総領事・小田切万寿之助、夫人桂子）、大島夫人（オランダ公使館書記官・大島富士太郎、夫人良子）

日中の先行研究及び拙稿において、大半の日本人女性は特定済であるが、池田信子についてはこれまで言及がない。そこで本稿後段にて検討を試みる。

二 一九〇〇年前後（明治後期）の鎌倉

鎌倉は、東京に近郊の温暖で風光明媚な地であることから、現在も国内外から人気の観光地である。単士釐来日当時の鎌倉は、どんな様子だったのだろうか。以下、島本千也『鎌倉別荘物語——明治・大正期のリゾート都市——』（島本千也、一九九三年。以下『別荘物語』と略称）をもとに概観する。

一八八七（明治二十）年七月に東海道線（横浜——国府津）、翌々年六月に横須賀線（大船——横須賀）が開通した。この頃から、鎌倉は別荘地として注目されるようになった。井上馨が極楽寺に別荘を新築したのを皮切りに、政官界の要人や華族たちが次々と別荘を建て始めた。地域別に見ると、長谷、由比ヶ浜、材木座、坂ノ下、極楽寺など古くから村がある海岸沿いが好まれたようである。単士釐が来日した一八九九年の九月には、大町に内親王のために鎌倉御用邸も造営されている。⁵『別荘物語』が引く『鎌倉議會史 記述編』（鎌倉市議會、一九六九年）によると、一九〇三年の鎌倉の別荘戸数は、二七〇戸を数えた。その後も別荘は増え続け、一九〇八年、別荘所有者たちの親睦団体「鎌倉倶楽部」が組織された。一九一二年の別荘数は四八〇戸、町の人口の三割を別荘居住者が占めるに至り、別荘最盛期を迎える。しかし、一九二三年九月一日、関東大震災が起き、鎌倉も甚大な被害を受けた。これを機に鎌倉は、別荘地から常住地へと変化していった。

外国人も早期より鎌倉に別荘を持ち始めている。一八八九年四月二十五日『読売新聞』朝刊に、イタリア公使が鎌倉に別荘を新築したとの記事がある^⑥。但し『別荘物語』『別荘所有者一覧（明治四十五年（一九一二））』によると、五四六戸のうち欧米人（含帰化人）は十戸、ニパーセント弱にとどまり、決して多くはない^⑦。銭恂がこの地にも居を構えた経緯は不明であるが、東京のみならず中国航路の発着地・横浜へも至便であったこと、風景や気候が良かったことも一因であろう。では、単士釐・銭恂夫妻は、いつ頃鎌倉に滞在していたのだろうか。

三 単士釐・銭恂夫妻の鎌倉滞在時期の検討

単士釐の詩より鎌倉及びその周辺（神奈川県）を詠んだ作品名とその創作時期を抽出すると以下のとおりである^⑧。詩題は、『受茲室詩鈔』（李雷輯校『清代閨閣詩集萃編』第九冊、中華書局、二〇一五年）に拠る。

游塔之沢宿福住楼

一九〇〇年四月

箱根

偕夫子游箱根（四首）

同

同

庚子秋津田老者約夫子偕予同游金沢及横須賀即事

一九〇〇年秋

金沢（横浜）横須賀

江島金亀楼饒歲依積頭歩齋主人原韻

一九〇〇年旧曆大晦日

江ノ島

二十世紀之春偕夫子住鎌倉日游各名勝用蘇和王勝之游鐘山韻

一九〇一年二月

鎌倉

辛丑春日偕夫子陪夏君地山伉儷重游江島再步前韻

一九〇一年二月

江ノ島

題金沢八景（八首）

未詳

金沢（横浜）

単士釐詩のうち、詩題に日本の地名を記す九組のうち、七組は鎌倉周辺の作である^⑨。ここから、鎌倉周辺の光景やそこでの出来事が、単士釐にとっていかに印象深いものであったかを知ることができる。しかも、創作時期は一九〇〇年四月から翌春までに集中する。「題金沢八景」も同じ頃の作品であろう。

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

次に、単士釐詩及び錢恂関連文献^⑩、末弟錢玄同（一八八七～一九三九）の日記より、鎌倉関連の記録を整理して示せば、以下のとおりである。

一九〇〇年二月二十二日 鎌倉に居を構え、毎日周辺を妻単士釐とともに散策^⑫

四月 箱根旅行、塔ノ沢の福住楼宿泊

六月十三日 東京牛込在住^⑬

秋 津田仙・梅子父娘と金沢・横須賀への日帰り旅行

一九〇一年一月九日 錢恂、湖北省留學生監督を辞職（清朝駐日商務監督留任）、鎌倉へ移るか^⑭

二月十八日 江ノ島の料亭旅館金亀楼にて旧暦年越しの宴、家族のほか日本人の友人も同席

鎌倉の名所旧跡を巡る

春 江ノ島の金亀楼を夏地山一家とともに再訪

五月二十七日 引き続き鎌倉在住^⑮

九月五日 錢恂、鎌倉より近衛篤磨へ書簡^⑯

十五日以降 中国湖北省へ戻る^⑰

一九〇五年十二月二十九日 新橋駅発、家族十人で箱根湯本の旅館万翠楼へ年越し旅行（一月二日）^⑱

一九〇六年 三月二十八日 新橋駅発、家族十三人で江ノ島の金亀楼に宿泊^⑲

単士釐詩の創作時期と錢恂の記録は、ほぼ軌を一にしている。一九〇三年早春、夫妻はロシアへ渡り^⑳、一九〇五年末に再来日する。その後も東京から鎌倉方面への旅行記録はあるものの、居住したとの記録は見当たらない^㉑。以上のことから、単士釐が鎌倉に住んでいたのは、一九〇〇年二～六月、同年末～翌年九月の間とみてよいだろう。なお、近衛篤磨宛の書簡より錢恂の住所は、鎌倉坂ノ下と判明する。

四 朝日にこころ

鎌倉滞在期に単士釐と深い縁を結んだ人物の一人は、錢恂の妾となった日本人女性朝日であろう。当時の日本人女性の一般的な名前を考慮すれば、ひらがな又はカタカナで「あさひ」あるいは「あさ」であった可能性がある。朝日が初めて登場するのは、『癸卯旅行記』一九〇三年三月六日（新曆四月三日）であるが、単士釐の詩より錢家に入った時期が推測できる。「江島金龜樓饒歲依積跼歩主人原韻（江ノ島金龜樓にて歳を饒る 積跼歩主人原韻に依る）」全二十七聯の第二十五聯以降がそれで、錢恂のもとへ妾が来たことを次のように祝した。

攬眺渾忘日没西 攬眺して渾べて忘る 日没の西^{（七）}

扶持尤喜得新婦 扶持して尤も喜ぶは 新婦を得しこと

異邦樂聚兼親友^{（八）} 異邦樂しみて聚まりし 親と友と

載詠駢征歌四牡^{（九）} 載に駢征を詠じ 四牡を歌う

椒盤索進屠酥酒^{（十）} 椒盤もて索め進む 屠酥の酒

洗琖更酌爲君壽 琖を洗ひ酌を更め 君の寿を為さん

夫妻の詩は、浙江同鄉会『浙江潮』第二期（浙江省同鄉会雜誌部、一九〇三年二月）「文苑」欄に掲載され、錢恂の詩題を「庚子陰曆除夕述懷時在日本」と記す（筆名は錢恂^{（二五）}富士始^{（一）}、単士釐^{（二六）}受茲室主人）。『庚子陰曆除夕』は、西曆一九〇一年二月十八日であり、それ以前、朝日が嫁いできた^{（二七）}とわかる。また、錢恂「原作」の対応句（第二十聯）「衆醉獨醒相卯酉、恤周枉自煩嫠婦（衆は酔い独り醒めて卯酉を相^{（二八）}、周の枉自として嫠婦を煩わしむを恤れむ）」より、朝日が未亡人であったと推測される。

ここで、当時の日中両国における妻妾制度を概観しておきたい。清末における婚姻の基本は、伝統的な一夫一妻制で、その決定権は父母あるいは家長が有していた。とはいえ、富裕層では妾をおくことも珍しくなく、妻妾同居

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

が一般的であつた。妾の出自は、正妻や家の使用人のほか、売買による婚姻もみられた。そのため、家庭内における正妻と妾の立場は、法律上も社会通念上も大きな隔たりがあつた。⁽²⁷⁾一方、我が国では明治維新以降も、制度上一夫多妻制度が許容されていたが、明治三十一（一八九八）年七月に民法（通称「明治民法」）が施行され、法的には一夫一妻制へ移行した。⁽²⁸⁾しかし、明治民法は封建的な家制度に基づくものであり、実態として妾は容認され続けることになつた。⁽²⁸⁾従つて、当時、中国人男性が日本人女性を妾として迎えることも十分あり得たろう。

単士釐にとって、朝日はどのような存在だったのだろうか。先の詩で単士釐は、錢恂が妾を迎えたことを喜び、祝杯を挙げる。単士釐は鎌倉暮らしの間に、下田歌子『新選家政学』、永江正直『女子教育論』などの翻訳に取り組んだ。朝日が中国語を解したかは不明だが、何らかの形で手伝った可能性もあるだろう。また、『癸卯旅行記』によると、上海へ立寄つた際、単士釐は錢恂と別れて硤石鎮へ帰省している。錢恂が、ロシア同行を願う湖北自強学堂学生の対応に忙殺されていたため、その間を利用したのである。このとき、朝日も単士釐に随行している。⁽²⁹⁾朝日が夫たる錢恂を残して単士釐と行動を共にしたこと、単士釐の世話係も兼ねていたと推測される。

管見の限り、ロシア旅行後、既公刊の書に朝日の名を記すのは、一九〇五年十二月の日本渡航時及び同年末の箱根旅行時のみで、その後は見当たらない。但し、劉甜甜「單士釐的文學創作與与文學活動」（碩士論文）に付す「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」に朝日の名を冠する以下の二首がある。⁽³¹⁾

癸丑二月一日積雪盈尺侍妾朝日戲製雪灯以娛稚孫輩喜賦

（癸丑二月一日 積雪尺に盈ち、侍妾朝日戯れに雪灯を製り、以て稚なき孫輩を娛しませ喜びて賦す）

雪薄光能透

雪薄く光能く透り

氷堅火自深

氷堅く火自ら深し

圓明堪代月

円明なること月に代うるに堪え

相濟不相侵

相い濟けて相い侵さず

癸丑二月一日は一九一三年三月十八日にあたる。当時、単士釐たちは北京に住んでいた。³² この日大雪が降り、朝日は単士釐の孫たちのために、雪灯籠を作った。円形の雪灯籠が放つ光は満月に似て、子ども達も単士釐も大いに楽しんだ様子が描かれる。雪の冷たさを厭わないほど、朝日は子どもが好きだったのだろう。また、雪灯籠を作ることができたことから、朝日は降雪地の出身だったのかもしれない。

寄朝日（朝日に寄す）

最是清宵夢不成	最是なるは	清宵	夢成らざること
觀書冀引睡魔生	書を觀て	冀は	引睡し 魔生ずるを
閑愁胡恨偏牽惹	閑愁	胡ぞ恨まん	偏えに牽惹すを
目痛拋書淚又傾	目痛み	書を抛ち	淚又傾く

「寄朝日」の創作時期は不明であるが、夢の中で再会を願うことから朝日が亡くなったことがわかる。悲しみのあまりなかなか寝つけず、涙がこぼれる。劉氏は、未公刊の詩「癸丑歲鈔書懷」³³の以下の句を根拠として、朝日がこの年のうちに亡くなったと指摘している（癸丑Ⅱ一九一三年）。

訣別非關年壽夭	訣別	年寿の夭に関らず
乖離詎謂久寬仁	乖離	詎りて謂う 久しく寬仁なりと
十年待我今何往	十年	我に待し 今何ぞ往かん
遍飲屠蘇少一人	屠蘇を遍飲するもの	一人を少く

第一句より、朝日は単士釐よりも若かったと推測される。第三句に「十年」とあるが、先述のとおり、朝日が銭家に入ったのは一九〇〇年末頃で時間的に問題ない。直下の「待我」は、朝日が単士釐にも仕えていたことを示し、

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

先の推論とも合致する。本詩全体から、朝日を喪った単士釐の深い悲しみが看取される。錢恂に嫁して以来、東京・鎌倉、ロシア旅行、欧州赴任など、慣れない異国暮らしを支え続け、単士釐にとつて朝日は、かけがえのない同志のような存在となっていたのかもしれない。

五 池田信子について（試論）

単士釐が日本人女性に対して贈った詩は三篇ある。このうち、実践女学校校長の下田歌子、外交官小田切万寿之助の夫人桂子は、既に関係が明らかになった。以下、未解明の池田信子について、鎌倉で出逢った可能性を試案として提起したい。まず「寄池田信子」三首を見てみよう。

其一

絲絲垂柳縮行人
小立東風酒半醒
無限離情迴首處
落霞紅映遠山青

糸々たる垂柳 行人に縮ぬ
小に立てる東風に 酒半ば醒む
無限の離情 首を回らす処
落霞紅映 遠山青し

其二

旅行一日變陰陽
料峭春寒薄袂侵
寄語璇閨宜保重
莫教稽古坐更深

旅行一日 陰陽を變じ
料峭たる春寒 薄袂侵す
語を璇閨に寄す 宜しく保重し
稽古 坐るに更深ならしむこと莫かるべし

其三

豊恵佳章學步難

疊ねて佳章を恵まれしも 学步難く

祇將途路報平安

ただ將って 途路 平安を報ず

衛生風俗多名論

衛生風習 名論多く

攜取篷窗次第看

篷窓に携取して 次第に看ん

公刊詩集二種では、ロシア旅行期の後方、下田歌子宛の送別詩よりやや前に置かれることから、下田歌子宛と近い時期の作と思われる。日本人宛詩歌のうち唯一の三首連作であり、わざわざその名を冠していることから、単士釐にとつて思い入れの深い特別な存在であったことが窺える。他方、語彙は比較的平易なものが多く、丁寧な印象を受ける。さらに第二首の「璇閨」は、相手が高貴な身分であったことを窺わせ、続けて夜更けまで勉強しすぎないようにとやさしく氣遣うことから、修学期であったとも考えられる。

この条件を充たす人物として、単士釐一家と同じく鎌倉坂ノ下に別荘を所有していた旧岡山藩主池田侯爵家の女性をあげたい。池田信子は、岡山藩第九代藩主で弾正大弼の池田茂政（一八三九～九九）六女、祖父は水戸藩主徳川斉昭、徳川第十五代將軍慶喜は伯父にあたる。家督は、幕末に第十代藩主章政（一八三六～一九〇三）へ、その後は詮政（一八六六～一九〇九）、禎政（一八九五～一九二〇）へと引き継がれた。『人事興信録』第二版（人事興信所、一九〇八年）には、「池田詮政」の家族欄に「叔母 信子 明治十七（一八八四）年九月生」とある。一九〇一年当時は十六歳となる。⁽³⁴⁾なお住所は、荏原郡大崎村字下大崎である。⁽³⁵⁾

池田信子に関する文献として、岡山大学附属図書館池田家文庫資料がある。⁽³⁶⁾ここから前半生を概観すると、一八八七年に天城池田家の養女となるが、一八九二年には復籍する。一九一一年十二月二十七歳のとき、神戸元町の善照寺住職佐々木祐言のもとへ嫁いだ。⁽³⁷⁾

嫁ぎ先の浄土真宗本願寺派善照寺は、天正十三（一五八五）年開山と伝わり、現在のJR三宮駅付近に広大な敷地があった。六甲山に日本初のゴルフコースを作ったイギリス人A・H・グループ（Arthur Hesketh Group）は同寺

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

に下宿し、住職の世話で日本人女性と結婚したという。また、宮内庁出仕者がいた縁で、明治天皇が神戸を訪れた際にお忍びで同寺を訪れたとも伝わる。³⁸⁾ 佐々木祐言の次弟、泉谷祐勝（一八八二—一九六七）は、天狗倶楽部の一員、第一回早慶戦に早稲田大学野球部の一番・捕手として出場した。末弟の佐々木祐哲も慶應義塾大学野球部で遊撃手として活躍したという。³⁹⁾ 神戸でも特別な寺であったようだ。

さきの岡山大学附属図書館池田家文庫「信子君御縁組諸書綴」（一九二一年）の中に、婚礼持参品を列記した「信子様御道具帳並入記」がある。そこには家紋付の各種調度品、雪舟や寂蓮筆の掛物、茶道具など数多くの興入れ品がずらりと並ぶ。中ほどに「書籍」の項があり「本箱 式個」と記す。ここから、信子の愛好した書物を検討したい。その書名と数量を記載順に示せば以下のとおり。

万葉代匠記（三十一冊）、万葉檜落葉（五冊）、明題和歌全集（拾冊）、古今和歌集打聴（六冊）、南木誌（八冊）、朗詠国字抄（帙入四冊）、玉の小櫛（九冊）、四書（拾冊）、五経（拾巻冊）、名家歌集（巻冊）、類題和歌集（三十一冊）、外 歌書雜書類

和書に混じり、『四書』『五経』がある。当時、華族子女が結婚に際して経書を持参することは、一般的なことだったのだろうか。例えば、江戸時代後期、薩摩藩主島津斉彬の母・弥姫周子（鳥取藩主池田治道の娘）は、嫁入り道具として多くの漢籍を持参し、自ら経書や『史記』を用いて教育したことから賢夫人と称された。明治に入り、華族女学校の教本に『四書摘』（一八八九年初版）が登場するが、書名どおり経書の抜粹にすぎない。⁴⁰⁾ これらの状況を勘案すると、信子のような立場の女性が婚家へ経書類を持参することは珍しかったように思われる。

また、和書類の中にも漢文で書かれたものがある。「南木誌」は、中山利質編『楠木誌』八卷（文久二（一八六二）年刊）または中山利質編長山貫校訂『南木誌』五卷（元治元（一八六四）年跋）を指す。楠木正成と息子たちの伝記や遺文を集めた書で、本文も注も漢文である。また「朗詠国字抄」は、高井蘭山『和漢朗詠集』八卷（享和三年跋）の略称。『和漢朗詠集』の漢字仮名混じり文による注釈書で、漢詩には訓点が付されている。信子は

漢文の素養があり、漢詩も好んでいたと思われる。

その他の和書にも注釈書が多い。契沖『万葉代匠記』二十巻は水戸光圀の依頼による『万葉集』の注釈書、賀茂真淵講・上田秋成修訂『古今和歌集打聴』二十巻は『古今集』の注釈書、本居宣長『源氏物語』玉の小櫛』九巻は『源氏物語』注釈書である。さらに正木千幹『万葉〔集〕』五巻（文化十二年序）は『万葉集』の語彙分類集である。残りの三書は和歌集である。撰者未詳『明題和歌全集』は近世初期の類題和歌集、『類題和歌集』三十一巻（元禄十六年）は後水尾天皇の勅撰歌集、『名家歌集』は複数候補があり未詳。書名を記す和書類のうち、半数以上が注釈書に類するものが占める。その他、書名を記さないものも信子が愛読していた書であろう。

これらの持参書籍から、信子は学問好きの女性であったと思われる、この点も単士釐の詩と符合する。

先述のとおり、坂ノ下は、早期より高級別荘地となっていた。⁴³大橋良平『現在の鎌倉』（通友社、一九一二年）「別荘一覧」に「池田禎政」の名が見え、所在地もまた坂ノ下である。⁴⁴過日、現地を実査したところ、単士釐宅跡地より岡山池田家別荘跡地までの所要時間は五分弱で、至近距離と言って良い。

但し、単士釐の在住時に池田家の別荘があったのか問題が残る。「池田侯」と記す文献は複数あるが、旧鳥取藩主池田仲博⁴⁵も侯爵である。こちらは、宮内庁『明治天皇紀』第九（吉川弘文館、一九七三年）一八九九年一月に記事がある。管見の限り、旧岡山藩池田家別荘の創建時期は不明である（待考）。先述のとおり、鎌倉御用邸が一八九九年に造営されて以降、避寒のために内親王たちは毎冬ここに滞在していた。既に別荘があったとすれば、信子が同じような行動をとった可能性があり、単士釐も存在を知り得ただろう。

一九四五年三月十七日、神戸は空襲を受けた。善照寺もほぼ全焼し、信子の持参品の大半も灰燼に帰したという。翌年二月、信子はこの世を去った。その後、善照寺は別邸のあった山本通へ移転し、現在に至っている。⁴⁶

以上、池田信子について、岡山池田藩出身の女性との一案を提起した。単士釐の鎌倉在住期間に既に同家の別荘が在ったという条件を満たせば、妥当性は高いだろう。いずれにせよ、単士釐にとってその名を忘れ得ぬ日本人女性であったことは確かである。

おわりに

本稿は、単士釐の詩歌等をもとに、鎌倉滞在時期とそこで時間を共にした日本人女性について検討した。単士釐は、現存する日本にまつわる詩歌の半数以上をこの時期に創作し、その風景や出来事を詠み込んだ。また、この間、翻訳にも挑戦している。鎌倉での日々が充実し、単士釐にとって好ましいものであったことと思わせる。

朝日は、鎌倉滞在とほぼ時を同じくして錢恂のもとへ嫁いできた。単士釐の詩文からは心を通わせていた様子が窺える。また池田信子について、旧岡山藩主茂政六女との試案を提起し、別荘所在地や蔵書から検討した。

今後は、単士釐編『清閨秀正始再続集』『清閨秀藝文略』などの我が国における所蔵経緯等の解明につとめてゆきたい。

注

- (1) 本稿は、基本的に西暦を用い、適宜元号を付す。単士釐（一八五八～一九四五）は、浙江省蕭山の人、字は蕊珠、号は受茲。光緒十（一八八四）年、錢恂の後妻となる。夫の日本赴任以降の約十年間、日本や欧州各地に赴いた。著作に『受茲室詩稿』、『癸卯旅行記』、『清閨秀正始再続集』、『清閨秀藝文略』などのほか、下田歌子『家政学』、永江正直『女子教育論』の漢訳もある。錢恂（一八五三～一九二七）は、浙江省湖州府歸安県の人。幼名は学嘉。号・室名は、蹕歩主人、受茲堂主人、積蹕步齋など。光緒十三（一八八七）年、薛福成の下で天一閣樓蔵書目録編纂に携わり、欧州各地の公使館に勤務。帰国後は張之洞幕下に移り、一八九八年に留学生監督として初来日、たびたび日中間を往復、一九〇三年にはロシアへ長期出張した。一九〇七年オランダ、翌年イタリア大使（出仕大臣、一九〇九年離任）。著書に『重斟唐韻攷』、『壬子文瀾閣所存書目』、『二二五疏』など。単士釐の文学活動及び錢恂に関する先行研究については、拙稿「単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに——」（『文学研究』第一一八輯、九州大学大学院人文科学研究院、二〇二二年三月、一～三八頁）、「単士釐の出逢った日仏の女性たち」（『中国文学論集第

五十号、九州大学中国文学会、二〇二二年十二月、二二七―二四四頁）注（1）参照。長男の錢稻孫（一八八七―一九六六）は、錢恂・単士釐の長男。父に随い日本へ留学、慶應幼稚舎などで学び、欧州へも随行。中華民国教育部勤務を経て、清華大学教授となり、日本人留学生の目加田誠博士らを自邸に寄寓させた。戦後、漢奸として有罪となる。万葉集や志賀直哉作品などの日本文学を翻訳した。

（2）前掲拙稿「単士釐の出逢った日仏の女性たち」参照。

（3）『癸卯旅行記』は、中国人女性として初めての海外旅行記とされる。一九〇三年春、東京からロシアの首都・ペテブルクまで、約二ヶ月半の旅行記で、旅の途中で見聞きした風景や印象を詳細に綴る。初版は、一九〇四年東京・同文印刷舎刊。一九八一年に初めて湖南人民出版社より校点本が出版された（以下「湖南点校本」と略称）。日本語訳に鈴木智夫『癸卯旅行記訳註——錢稻孫の母の見た世界』（汲古書院、二〇一〇年、以下「鈴木氏訳註本」と略称）がある。

（4）現存する単士釐詩集のテキストはいずれも鈔本（括弧内に校点本を示す）で、①羅守巽所藏『受茲室詩稿』三卷（陳鴻祥校点、湖南文藝出版社、一九八六年。以下「湖南文藝本」と略称）、②復旦大学図書館所藏『受茲室詩鈔』、③復旦大学図書館所藏『受茲室詩学吟稿』、④遼寧省図書館所藏『受茲室詩鈔』（李雷輯校『清代閨閣詩集萃編』第九冊、中華書局、二〇一五年、五三〇―五三六頁、後半部分は①の転載。以下「中華書局本」と略称）の四種。このほか、劉甜甜「単士釐的文學創作與文學活動」（碩士論文）の附録三に「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」がある。本稿は、『中華書局本』を底本とし、必要に応じて適宜その他のテキストを用いる。

（5）内親王は、富美宮と泰宮内親王。一九〇〇年一月より毎年避寒、避暑に訪れたが、両内親王が結婚すると省みられなくなる。一九二三年の関東大震災で甚大な被害を受け、一九三一年八月に廃止された。跡地は、鎌倉市立御成小学校となり、正門などが残されている。

（6）「伊国公使の新宅披露」（二頁）参照。一八九九年、条約改正に伴い外国人居留地が撤廃される。

（7）本資料に中国人らしき名は見当たらない。中華民国が建国した年であることが影響した可能性がある。

（8）詩の分析は、前掲拙稿「単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに——」を参照。

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

(9) その他二首の詩題は「庚子四月十八日舟泊神戸」、「日光山紅葉」である。

(10) 錢恂の来日期間前半の動向は、拙稿「単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに——」を参照。その他、高木理久夫・呉格「錢恂年譜（増補改訂版）」（『早稲田大学図書館紀要』第六〇号、早稲田大学図書館、二〇一三年三月、一〇八〜一九五頁。以下「錢恂年譜」と略称）、近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』第一〜五卷（鹿島研究所出版会、一九六八〜一九六九年。以下「近衛日記」と略称）、衛藤藩吉・李廷江『近衛篤磨と清末要人——近衛篤磨宛来簡集成』（原書房、二〇〇四年。以下「近衛来簡」と略称）などを参照した。中国人の文献は旧曆（括弧内に新曆）で記し、各項目の末尾に出典を示す。

(11) 楊天石主編『錢玄同日記（整理本）』（北京大学出版社、二〇一四年）参照。錢玄同は、一九〇二年秋、実母を喪った。その後、錢恂の勧めに従い一九〇五年十二月〜一九一〇年三月頃日本に留学した。帰国後、魯迅らとともに文学革命を主導し、北京大学、北京師範大学などで小学を講じた。

(12) 「錢恂年譜」拠『汪康年師友書札』、「弟近居鎌倉、日日偕内人歩十餘里、數里不等、出游致足樂」汪康年（一八六〇〜一九二一）は、浙江省杭州の人、字は穰卿、光緒二十（一八九四）年の進士。一八九〇年より張之洞のもとで両湖書院の教師などを歴任、一八九六年に上海へ移り旬報『時務報』を創刊（のち『昌言報』と改称）、一八九八年に日刊『時務日報』（まもなく『中外日報』と改む）を刊行するなどした。

(13) 「錢恂年譜」拠『汪康年師友書札』、「恂居牛込仲「之」町……前函題麻布區誤」。地番省略、以下同。

(14) 「錢恂年譜」拠『東京朝日新聞』、鈴木智夫訳・単士釐『癸卯旅行記訳註』（汲古書院、二〇一〇年）一八〇頁注一三参照。

(15) 「錢恂年譜」拠『汪康年師友書札』、「吳君稚暉來、恂理應先導、惟恂避地鎌倉、至今尚未相晤。游事以使館為介。自便利」。吳稚暉（一八六五〜一九五三、名は敬恒）は、江蘇省武進の人。一八九八年ごろから変法思想に傾倒、翌年の南洋公学学長に就任、蔡元培と親しくなる。一九〇一年春、日本に私費留学して宏文学院に入り、孫文らの革命同盟会に参加。翌年、デモに参加中、駐日公使蔡鈞により強制排除された悲憤から自殺を図ったため、日本を逐われ帰国した。翌年再来日していたが再帰国し、蔡元培らと上海で愛国学社を組織した。のち、中国国民党の反共右派として

活動した。橋川時雄『中国文化界人物総鑑』覆刻版（名著普及会、一九八二年）一四一頁ほか参照。

- (16) 『近衛来簡』四十五、四十六（四四八頁の四十六項影印は、名を「錢鏐」と記す）、「去十日間、恂接張之洞君來電、有命代呈……恂住鎌倉……坂ノ下町……錢恂」。同一九〇一年九月八日、長岡護美子爵が近衛篤磨へ錢恂の書状及び張之洞電文を届ける（『近衛日記』第四卷二七四頁）。

- (17) 『近衛日記』第四卷「約により、岸田吟香、錢恂等に面会す。錢は近々出発帰国するとの事なり」（二七八頁）。

- (18) 『錢玄同日記（整理本）』十一～十三頁。万翠楼福住は、寛永二（一六二五）年創業の老舗旅館。同行者は、錢恂、单士釐、妾朝日、錢潤輝（錢恂次女）・董鴻禕夫妻と子女三人、錢穩孫（錢恂次男）、錢玄同。

- (19) 『錢玄同日記（整理本）』三一～三二頁。「全家往游江島」と記し、十三人連れであることから、錢恂主催の旅行と思われる。錢稻孫・包豊保夫妻と娘重新の三人が加わったのだろう。

- (20) 直前の住所は、牛込矢来町。拙稿「单士釐一家と下田歌子との交流」（『中国文学論集』第五十一号、九州大学中国文学会、二〇二二年、九五～一二頁）参照。

- (21) 前掲「錢恂年譜」によると、一九〇六年六月四日、早稻田大学教授青柳篤恒宛書簡に記す錢恂の住所は本郷根津西須賀町（二六一頁）、根津神社の西側裏手付近であったと思われる。

- (22) 『浙江潮』第二期は下三字を「親兼友」に作る。

- (23) 「駢征」は、『詩経』小雅「皇皇者華」を指す。「四牡」も『詩経』小雅にあり「鹿鳴」とともに宴席で愛唱された。

- (24) 『浙江潮』第二期は「蘇」字を「蘇」に作る。

- (25) 詩題に異同がある。『浙江潮』は「江島金龜樓餞歲和韻歩主人元韻」、『湖南文藝本』は「江島金龜樓餞歲積韻歩齋主人原韻」と作る。『浙江潮』は錢恂詩「庚子陰曆除夕述懷時在日本」を先に置き、次に本詩と单士釐「春日偕積韻歩主人及夏地山夫婦又夏循蘭再游江島再歩原韻」を載せる。

- (26) 「卯酉」は、東と西、または卯酉線。第五十四句は、『春秋左氏伝』昭公二十四年六月「廢不恤其緯而憂宗周之隕（廢其の緯を恤えずして宗周の隕を憂う）」に拠る。また、ロシア艦隊の択捉島出現に対して海防の必要性を訴えた蒲生君平の「不恤緯」（一八〇八年筆、五八年刊）を想起させる。「枉自」は、むざむざと、むだに。二十六、二十七聯原文

单士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

は以下のとおり（小字は自注）。「且結愛國同文友、不盡驪黃與牝牡。舉杯痛飲屠蘇酒、更酌金龜惠比壽。」
是日全家偕東友游江島 飲于金龜樓也。『惠比壽』日本製麥酒名。

(27) 関西中国女性史研究会『中国女性史入門——女たちの今と昔——』（人文書院、二〇〇五年）野村鮎子「旧中国の婚姻」（二六～一七頁）、同「家庭内の女性のヒエラルキー」（二七四～一七五頁）ほか参照。

(28) 松本暉男「近代日本における一夫一婦制の発展」〔関西大学人文科学研究所『関西大学法学論集』第十三巻四——六号、三七七～四一二頁〕ほか参照。

(29) 『癸卯旅行記』三月四～六日（西暦四月一～三日）参照。

(30) 『錢玄同日記（整理本）』一九〇五年十二月九日（九頁）。

(31) 劉氏は復旦大学蔵書二種より「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」を作成したと記すが、二首の出典は記されていない。

(32) 「錢恂年譜」一八一頁参照。錢恂は、直前の三月三日、北京で開かれた横浜正金銀行晩餐会に出席している。

(33) 劉氏論文によると『受茲室詩鈔』所収。

(34) 『人事興信録』第二版（人事興信所、一九〇八年）一〇八頁「池田詮政」の項参照。なお、「華族女学校高等中学科卒業生氏名」〔『女子学習院一覽昭和二年乙』（女子学習院、一九二八年）明治三十七年七月卒業者に「池田信子」とあるが、華族ではないこと、現姓を「本山」と付記することから別人と判断した。

(35) 旧岡山藩下屋敷。約三万八千平方メートルもの敷地には鴨場もあり、遠くに富士山を望むことができたという。昭和の初め頃から住宅地として割譲が始まった。戦後、その一部約七千平方メートルを品川区が買収し、一九八四年に回遊式庭園「池田山公園」が整備された。

(36) 池田信子関連資料は、「信子様天城邸御縁組一件」（一八八七年）、「信子様御縁組一件」（一八八七～八八年）、「信子様御親族書」（二九二一年）、「信子様御婚礼関係書類」（一九一一年）、「信子君御縁組諸書綴」（一九一一年）、「信子君御縁組諸書綴」（一九二一年）、「信子様御縁組費領収証」（一九二一年）以上七点。岡山大学附属図書館「池田家文庫マイクロフィルム目録データベースシステム」（URL = <https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/icedake/micro/ja>）最終確認日

＝二〇二三年八月一日）参照。なお、同文庫には、明治期の鎌倉関連資料として、相良国太郎『鎌倉案内』（一八八八年）、「鎌倉実測図」（一八八八年、URL＝<https://repo.lib.okayama-u.ac.jp/zoomify/T9-43.html>）最終確認日＝二〇二三年八月三日）がある。

- (37) 当主宣政（一九〇四～八八）が未成年であったため、兄の勝吉男爵（一八七四～一九四一）の養女となったのちに結婚。佐々木祐言は再婚であった。

- (38) 善照寺坊守佐々木晴美氏の「ご教示による。

- (39) 横田順彌『「天狗倶楽部」快傑伝——元氣と正義の男たち——』朝日選書九九八（朝日新聞出版、二〇一九年）三一九～三二七頁参照。泉谷祐勝夫人の鎮子は、池田信子の実妹。

- (40) 国立国会図書館「デジタルコレクション」で閲覧可能（URL＝<https://dl.ndl.go.jp/pid/754099>）最終確認日＝二〇二三年八月一日）。

- (41) 『南木誌』五巻本（元治元年跋）は、国立国会図書館「デジタルコレクション」で閲覧可能（URL＝<https://dl.ndl.go.jp/pid/2608252>）最終確認日＝二〇二三年八月一日）。

- (42) 国立国会図書館「デジタルコレクション」で閲覧可能（URL＝<https://dl.ndl.go.jp/pid/2607988>）最終確認日＝二〇二三年八月一日）。

- (43) 前掲『別荘物語』に「明治四十五年段階における鎌倉の皇族・華族の別荘七戸中（鶴沼地区含む）十七戸が長谷・坂ノ下地区に集中していた」（八二頁）、「明治期、家屋割りの町税の最も高いのは八幡前の若宮大路西側と長谷・坂ノ下地区であった」（八七頁）。同書六四頁「表二 字別戸数の変化」によると坂ノ下の戸数は、一八八六年十二月二二七戸、一九一二年一月二〇四戸。

- (44) 別荘所有者数は二十五、他の華族は、旧肥前大村藩主大村純雄伯爵、児玉源太郎陸軍大将子息の秀雄伯爵。

- (45) 『読売新聞』一九〇二年九月二十四日朝刊一頁に「池田候 宿痾保養の爲一昨日鎌倉に赴く」とあり、『貿易新報』明治三十八年八月四日記事中的別荘所有者にも「池田候」と記す（前掲『別荘物語』五五頁）。

- (46) 池田仲博（一八七七～一九四八）は、徳川慶喜五男、信子の従兄にあたる。別荘所在地は、長谷（現 鎌倉市長谷

単士釐の鎌倉暮らしと日本人女性との交流

三丁目)、単土釐旧居跡より徒歩十五分弱。

(47) 明治三十二年一月三十一日に「昌子内親王・房子内親王二月十日より寒を候爵池田仲博の鎌倉の別邸に避けん」とす(五八五頁)。

(48) 『としよりのはなし』第四版(鎌倉市教育委員会、一九八四年)に「久邇宮さまは坂ノ下の池田さんへ毎年夏避暑に来られ」と記す(一二八頁)が、昔語りのため時期は不明。池田詮政の夫人安喜子は、久邇宮邦彦(一八七三―一九二九、香淳皇后父)の実姉。

(49) 前出佐々木晴美氏による。信子は祐言逝去後、祐哲と再婚、各々一女があつたという。信子逝去後、遠戚より養子を迎え継承されている。当初の地は、接收されてJR三宮駅や学校となったとのこと。

執筆にあたり情報を提供くださった岡山大学土屋聡教授、神戸市善照寺住職佐々木様ご夫妻に深謝いたします。

※本研究は、JSPS 科研費 JP20K12947の助成を受けたものです。